

クオリア、性質、物

星野 徹*

世界には私一人だけが存在しているのではない。私以外にもさまざまな姿形をした無数の物が世界には存在している。そしてそれらの物がどのような性質を持っているかということを知覚によって知ることができる私は信じている。知覚は世界へ通じる窓であると思いはしている。それでは、物と性質と知覚体験はどのような関係にあるのだろうか。知覚は世界に存在する物とその性質について信頼するに足る情報を私に与えてくれるのだろうか。

I 二つのギャップ

目の前のガラス越しに日差しを浴びた緑の木々と、ところどころに白雲が浮かぶ水色の空が見える。部屋の中のスピーカーからは、ヴァイオリンやホルンやフルートの音が聞こえてくる。今はガラスは比較的きれいな状態であるが、ガラスが曇ればガラスの向こうの風景もぼやけて見えるだろう。私の目の水晶体が曇れば今度は風景全体が白濁することだろう。世界が二重になれば世界が二重に見えることだろうし、片目を押しでも世界は二重に見える。さらに瞼を閉じれば風景全体が消えてしまうし、耳をふさげば音が消えてしまう。世界や目や耳に変化がない場合でも、私の脳が変調をきたせば世界も相貌を変えるだろう。私の脳のせいで、風景が二重に見えたりかすんで見えたり、あるいは消えてなくなったりすることもあるかもしれない。

窓ガラスが曇ればガラス越しの風景がかすみ、水晶体が曇れば風景全体がかすむのは当たり前

のことである。私はガラス越しに、水晶体越しに世界と接しているからである。片目を押しと物が二重に見えるのもそれほど不思議には思われまいだろう。私は二つの目を介して世界と接しているからである。しかし脳となると話は別である。なぜ私の脳のせいで世界が二重になったりかすんだり、挙句の果ては消えてしまったりするのだろうか。私の脳の機能不全によって世界が消えることがあるのだとすれば、現に世界が私にこのような姿で現れているのも私の脳のおかげなのだろうか。「どのようにして色彩豊かな現象がぶよぶよした灰色の物質から生じてくることができるのだろうか。何が脳と呼ばれる臓器を他の臓器とこんなにも違ったものに行っているのだろうか。一つ一つは感覚を持たないニューロンが数多く集まるとどうして主観的気づきを生み出すことができるのだろうか。」

(McGinn, 1989)

私の知覚体験が私の脳状態と密接に関係していることは確かなことだろう。この視覚風景は脳によって生み出されているのかもしれないし、脳によって実現されているのかもしれない。ことによると、これは私の脳状態そのものであるのかもしれない。いずれにせよ、脳の視覚野が、色鮮やかな視覚体験という自らと似ても似つかないものをどのようにして生み出したり実現したりできるのか、さらには二つがどうして同じものでありうるのか、皆目見当がつかない。私の意識と脳の間には架橋不能なギャップ (explanatory gap) が横たわっているように思われる (cf. Levine, 1983, 1993)。

意識は脳によって産み出されると考える随伴現象主義者や、意識は脳が心に働きかけること

* ほしの・とおる

埼玉大学教養学部教授、哲学

によって心のうちに生じる現象であると考え、古典的二元論者ならば、このギャップを受け入れることができるかもしれない。特定の心的状態が特定の脳状態によって産出されるということは、二つの物体が距離の逆二乗に比例する力で引き合うということがそうであるように、おそらくこの世界に関する基本的な、端的な事実 (brut fact) なのである。世界中のあらゆることに説明がつくわけではない。なぜか知らなくても世界はこうになっているのだ、ということが世界のどこかにはあるはずである。脳と心との関係はおそらくそうしたことのひとつなのだろう。ところが、物理主義者にとってはそうは行かない。色とりどり、音とりどりの、香り豊かな、味わい深い知覚体験が脳の物理状態に他ならないというならば、なぜ同じものがこんなにも違った姿をしているように見えるのか、説明があつてしかるべきだろうからである。

しかし、いったい、私に見えている緑は私の視覚体験の性質なのだろうか。緑色をしているのは本当は木の葉ではないだろうか。色鮮やかなのは私の視覚体験ではなくて世界の方なのではないだろうか。その証拠に、緑色が見えていたときの視覚体験の性質、いわゆるクオリアに注意を向けようとしても、注意の行き着く先は目の前のガラス越しの木の葉である。透明なガラスと同じように視覚体験も素通しなのである。ただし、ガラスは曇ったりひびが入ったりすることがあるのに対して、体験は決して曇ることのない、どこまでも透明な存在なのである。

「体験の透明性」と呼ばれるこのような現象をよりどころに、クオリア、あるいは現象的性質、と言われているものは、実は表象された対象の持つ性質なのであり、表象性質なのである、と主張する人たちがいる。こうした表象主義 (representationalism) と呼ばれる説の言うところによれば、知覚や感覚の本質的機能は外界

や身体の状態についての情報を提供することにあるのであり、自分の意識状態について知ろうとして、凝視したり耳をそばだてたり精神を集中したりするのは筋違いなのである¹。

確かに白いのは壁であり、甘いのはチョコレートであり、カーカー音を立てているのはカラスであり、熱いのはお湯である。しかし、白く見える壁も甘く感じられるチョコレートもごく小さな粒子の集まりではないのだろうか。カラスの鳴き声と呼ばれているものは空気の振動であり、熱と言われているものは水の分子の運動ではないのだろうか。これらのものがどうして色や音や味や熱感のような、かけはなれた姿で私のもとへ現れてくるのだろうか。

シューメイカーは、意識状態がどのようにして脳の物理的状態によって実現されるのかという問題にかかわるレヴァイン流の説明ギャップを主観的説明ギャップ (subjective explanatory gap) と名付けたうえで、それよりずっと昔から知られていたもう一つのギャップ、客観的説明ギャップ (objective explanatory gap) が存在すると言う。それは色や音がどのようにして対象のマイクロな物理的性質によって実現されるのか、という問いにかかわるものである (Shoemaker, 2003)。

17 世紀以降の哲学者や自然科学者が色や音を物理的世界から排除したことはよく知られている。物は形と大きさと可動性を持つと考えるガリレオも、物の本質を延長にあると考えるデカルトも、一次性質として固性と延長と形と可動性を挙げるロックも、色や音や味やにおいを物そのものに属する性質とは考えない。それらは感覚主体の中のみ存在するのであり (ガリレオ)、物の持つ一次性質によって感覚主体の中に引き起こされた観念なのである (ロック)。

シューメイカーによれば、ガリレオやデカルトやロックは、色や音を心的領域へと蹴り上げ

る (kicking the phenomenal character upstairs) ことによって、ギャップのありかをミクロの物とマクロの物の間の領域から心と脳の間へと移し換え、主観的説明ギャップをつくりだしたのであるが、現代の表象主義者は色や音を再び物の領域に蹴り下ろす (kicking the phenomenal character downstairs) ことによって、客観的説明ギャップを復活させてしまったのである。結局、400年かけて問題は元の場所へ舞い戻って来たというわけである。

私は思考に行き詰まり視線を上方へ向ける。すると白い壁が見えてくる。私に今見えているあの白い壁、あれは特定の波長の光を反射するように配列された原子の塊なのだろうか、それとも私の脳のニューロンの興奮状態なのだろうか。そもそも視覚対象と視覚体験はどのような関係にあるのだろうか。

II 現象的性質と物理的性質

体験の性質であるとみなされている現象的性質は実は外界の状態、または自己の身体状態を表象する表象性質に他ならない、と主張する表象主義者にとって、痛み処理が課題となることは見やすいところである。痛みが生じるたびごとに、「これは虫歯、これは歯肉炎、これは胃の炎症、これは右掌の裂傷、これは額の擦り傷であれば左手親指の突き指」といったように、痛みの表象内容を即座に思い浮かべることができるような精度の高い痛み体験を持つ人を想像することはできるかもしれない。そうした人にとっては、痛みは身体の性質のように思われてくることだろう。しかし、われわれ普通の人間にとっては、歯の痛みが虫歯を表象することがたとえ確かなことだとしても、歯の痛みが虫歯の性質であるようには思われない。体験の透明性テーゼとは逆に、私には、痛みという感覚様

式の内部で虫歯に注意を向けようといくら頑張っても、結局歯痛に注意を向けることしかできない。虫歯が痛いとは、虫歯が痛みという性質を持っているということではなく、虫歯が痛みを引き起こしているということである。虫歯は私が感じているこの歯の痛みの犯人なのである²。

ところで、歯の組織が破壊された状態から中枢神経系の状態 (たとえばC線維の発火) に至る因果系列を考えることができるだろう。私が歯痛に注意を向け、「これを鎮める方法はないものだろうか」とつぶやいたとすれば、「これ」は、心的状態は中枢神経系の状態であるという心脳同一説の主張が正しければ、C線維の発火を指していることになるだろう。

白い壁が見えている場合にも、歯痛と同じような因果系列が存在するだろう。特定の反射率を持った壁が特定の波長の光を反射し、それが両眼を通して最終的に脳の視覚野のニューロンを興奮させる、というように。こうして、特定の反射率の壁の存在と視覚野のニューロンの興奮が因果関係にあり、しかも、視覚野のニューロンの興奮に視覚体験が対応しているとするならば、白い壁が存在することと壁が白く見えることの間因果関係が存在するということになるだろう。目の前に白い壁が存在するから壁が白く見えているのであり、視覚対象と視覚体験の間に因果関係があるのである。

ここまで考えた後で私はもう一度視線を上げてみる。白い壁が再び目に入ってくる。壁の白さならば指することができるような気がする。目の前に見えているあれである。しかし壁が白く見えていることは一体何のことなのだろうか。あれが原因で生じているはずの、壁が白く見えているという視覚体験はどこにあるのだろうか。しかし、虫歯が引き起こした歯痛に注意を向けることはできるのに、白い壁の存在が引き起こした白い壁の視覚体験に注意を向けることがで

きないとすれば、それはとても不思議なことである。

ここで次のような場面を考えてみよう。朝目覚めると、視野全体が白くかすんで見える。そこで私はつぶやく。「これはいったい何だろう。部屋の中に霧が立ち込めてきたのだろうか。それとも煙だろうか。水晶体が曇ったのだろうか。脳の血管が切れたのだろうか。」このように自問したときの「これ」は何を指すのだろうか。「霧が立ち込めてきたのだろうか、それとも煙だろうか」と考えるときは霧や煙という視覚対象を指しているのだろうか。それなら「脳の血管が切れたのだろうか」はどのようなことになるのだろうか。私は脳の血管を見ていると考えているわけではないだろう。答え方によって「これ」が何を指すか変わってくるとは奇妙なことではないだろうか。

「霧が立ち込めたのだろうか、煙だろうか」とつぶやくときも、「水晶体が曇ったのだろうか、脳の血管が切れたのだろうか」とつぶやくときも、実は、私は、なぜ風景が白くかすんで見えるのだろうか、という問いへの答えを探しているのであり、なぜこのような視覚体験が生じているのか知りたいがっているのである。そして、このような視覚体験を引き起こした原因の候補として、霧や煙や水晶体の白濁や脳卒中をあげているのである。

視覚体験についての問いが誘発されるのは、視覚に不都合が生じたときと疑われるときに限ったことではない。ベッドから起き上がってカーテンを開けてみると、これまで気がつかなかった遠くの看板の文字を読むことができ、その向こうの公園で遊ぶ子供たちの顔も判別でき、さらに富士山に登頂する人の姿まで見えるようになったとすれば、いったい何が起こったのかと驚くことだろう。「今日は空気が異様に澄んでいるのだろうか。寝ている間に誰かが私の目に強力

なコンタクトレンズをはめ込んだのだろうか。それとも、寝ている間に私の脳の視覚野の状態が変化したのだろうか。」この場合も、遠くの物がはっきり見えているという視覚体験のあり方について、その原因を思案しているのである。

上の二つは、いずれも風景全体、あるいは全体の見えに異変があった場合であるが、視野の一部に見慣れない現象が現れたときにも、やはり同じような問いが問われるだろう。まばたきの直後に視野の中央に黒い丸が現れたと仮定しよう。「あれは何だ。黒い UFO か、メガネに黒いしみがついたのか、それとも網膜に異常が生じたのか、はたまた脳の異常か。」「あれは何だ」というときの「あれ」は何を指しているのだろうか。黒丸という視覚対象だろうか。しかし黒丸は網膜剥離でもなければ脳状態でもないだろう。「あれは何だ」とは「なぜ黒丸が見えているのか」ということであり、「あれ」は黒く丸い見えを指すと考えるべきである。「あれは何だ」と驚く人は、あの見えの原因を知りたいがっているのである。

ここでまた白い壁を見つめてみる。眼前に広がる白い壁、あれは、正しくは白い壁の見えなのである。歯の周辺に広がるあれが歯の痛みであるのとそれは同じことである。先程と同じ見えが現れたのは、その間に霧が立ち込めたり、私の水晶体が曇ったり、私の脳が異常をきたしたりしなかったからである。視界を遮るものがなく、私の目も脳も正常であることが原因で、その結果がこのような見えなのである。

それでは、見えはロックの観念がそうであったように心的な存在ということになるのだろうか。目の前にあるように思われる木の緑や壁の白さは私の心に映し出された実在物の映像なのだろうか。まずは痛みについて考えてみよう。

歯痛が激しくなり、我慢できずに鎮痛剤を飲んだとしよう。痛みは徐々に退いて行くだろう。

そこで、退いて行く痛み・に注意を向けながら「これは今どうなろうとしているのだろうか」と思ってみることにしよう。痛み・の感覚が消失した後には「あれは どうなってしまったのだろうか、今でも存在しているのだろうか」と思ってみよう。「あれ」は もちろん消えてしまい今はどこにも存在しない、と誰もが答えるだろう。ちなみに、ここで、「あれ」ではなく「あれと同じようなもの」が今どこかに存在しているのだろうかと思ってみるなら、その人は、先程まで自分を悩ませていた歯痛と同じような歯痛に苦しむ他人の存在可能性について思いをはせていることになるだろう。では、先程の高精度の痛み能力を備えている人ならばどうだろうか。その人にとって「あれ」は虫歯を指すならば、「あれ」は鎮痛剤を飲んでも消えることはない。「あれ」を消すには歯医者に行くしかないだろう。「あれ」は鎮痛剤を飲むことによって存在しなくなったのではなく、痛みとして姿を現すことをしなくなっただけなのである。

道端に立つ赤いポストは日が暮れると見えなくなる。ポストに背を向けてもポストはやはり見えなくなる。今度は、先程まで見えていたポストの赤さを思い浮かべながら「今でもあれは存在しているのだろうか」と思ってみよう。暗闇の中に消え去っても、あるいは、私の視界から消え去っても「あれ」は存在し続けることができるのだろうか。いまでも「あれ」が先程と同じ姿で存在し続けているはずだと考える人は、「あれ」が「あのような姿で」そのもとに姿を現しているところの他の人間や神の存在を信じていることになるだろう。さらに「あれ」は「あのような姿」でしか存在することはできないと考える人がいるならば、その人は可感的性質に関する観念論者となることだろう。そのような人にとっては、ポストは暗闇の中や誰も見えないところでは赤さという性質を持たないので

ある。

「あれ」は誰のもとに姿を現すことがなくとも今でも存在し続けている、と考える人はいるだろうか。多くの人はおそらくそのように考えていることだろう。誰にも見られなくなった途端にポストが存在しなくなると考える人はほとんどいないのと同じように、皆が視線をそらした途端にポストが赤さという性質を失うと考える人もほとんどいないだろうからである。物についての観念論者がまれな存在であるように、物の可感的性質——とりわけ色——についての観念論者も希少であると言ってよいだろう。それでは、誰にも見られていないときの「あれ」はどのような姿で存在しているのだろうか。誰にも見られていないときの姿などあるのだろうか。

誰にも見られていないポストが今も赤いとすれば、それは、ポストが今でも先程と同じような姿をしているからというわけではない。こうして「赤さ」は二つの意味を持つことになる。暗闇の中に沈んでいったポストや誰にも見られていないポストは、鎮痛剤を飲むことによって痛みとして姿を現すことをやめてしまった虫歯と同じ立場にいる。痛まなくとも虫歯は虫歯であるように、暗闇の中でも、だれも見えてなくともポストは赤い。そのとき、ポストは誰にも赤い見えとして姿を現していないが、私がそれに目を向ければ赤い見え姿として自らを現すものとして、あるいは、赤い見え姿を生み出す力を持ったものとして存在し続けているのである。このようにしてポストに帰属させられる赤さは、見る者の存在から独立したポストの物理的性質とみなされることになるだろう。物理的赤が赤い見えを引き起こすのである。

私に先程現れた壁の白い見え、あれは、壁の白さによってもたらされたものである。壁が白いは壁が特定の反射率を持つことであり、特

定の反射率を持つとは、表面の分子が特定の仕方
で配列されているということであるならば、
あれは特定の仕方
で配列された分子の塊が引き
起こしたものである。しかし、あれが特定の仕
方で配列された分子なのではない。物理主義が
正しければ、痛みがC線維の発火であるように、
白い見えであるあれは脳の視覚野の状態なので
ある。

ここで注意をしなければならないことがある。
ポストが赤い見えとして姿を現すとは、赤い見
えが見えていることではないということである。
われわれは痛みを痛むことができないように見
えを見ることもできない。この点は触覚の方が
より明快かもしれない。机に触れると、机はつ
るつるで固くひんやりとしている。机は、触覚
的につるつるの固くひんやりとしたものとして
私のもとに姿を現すのである。しかし、私はそ
のとき机の触覚像に触れているわけではない。
私が触れているのは机そのものである。私が机
に触れることによって机は触覚的に姿を現すの
である。視覚についても同じである。私が見て
いるのはポストの像ではなくポストそのもので
ある。私がポストを見ることによってポストは
赤い見えとして私のもとに姿を現すのである。

ここで、物を見るとは物の視覚像を見ること
であり、物に触れるとは物の触覚像に触れるこ
とであると考えてしまえば、私が見ているのも
私が触れているのも私の心に映し出された外界
の事物の映像であるということになってしまう
だろう。そして、ヒュームが批判した、心の世
界と外的世界の二重世界説、あるいは、表象す
るものと表象されるものの二重存在説へと引き
ずり込まれて行くことになるだろう。二重世界
説が頭に浮かんでしまえば、今私が見ている像
と、像の原因である実物は似ているのだろうか
か、似ていないのだろうか、似ているとすればどの
程度似ているのだろうか、といった外界の存在

物の性質に関する懐疑を振り払うことは難しく
なる。知覚の対象は物ではなく知覚像であると思
ってしまったところから 17 世紀以降の近代
哲学の迷宮が始まるのである。

ロックの誤りは、観念という心的なものの存
在を認めたところにあるのではなく、観念を知
覚の対象と考えたところにあると言えるだろう。

III 表象か関係か

現代の知覚の哲学における最大の争点は知覚
が表象か関係かという点にあると言われること
がある。知覚とは外界に向けられ、外界を表象す
るものであると考える表象説 (representational
view) が、17 世紀以降主流派を形成してきた
ことは疑いのないことである。表象の媒体を心
と考えるにせよ脳と考えるにせよ、現象的性質
は全て表象性質であると考えにせよ、何もの
も表象しない現象的性質があると考えにせよ、
あるいは、われわれは表象性質に気づくこと
によって現象的性質に気づくと考えるにせよ、現
象的性質に気づくことによって表象性質に気づ
くと考えるにせよ、知覚とは表象であり、表象
内容は脳や心といった表象媒体の内在的性質に
よって決定されるという点に関しては多くの哲
学者の見解は一致していた。現代の表象主義者
だけでなく、デカルトもロックも、クオリア論
者も、センス・データ論者も全て広い意味での
表象説の信奉者ということになる。

ところが、現在、関係説 (relational view)
と呼ばれる、素朴実在論的色彩の極めて濃厚な
知覚論が一定の影響を持ち始めている³。関係
説とは、その名の通り、知覚は知覚するもの
と知覚されるものとの間の関係であるという説
のことなのであるが、これは、一見すると、あ
らためて主張するほどのこともない、ごく当
たり前のことのように思われるかもしれない。知

覚が知覚対象と知覚主体の関係において生じることを否定する人はいないだろう。観念論者でさえ、知覚を、心的像と主体との関係と考えているのだろう。しかし、関係説の言うところの関係とは、因果関係のことではないし、もちろん観念やセンス・データと主体との関係でもない。関係説の名付け親であるキャンベルによれば、関係説は、「S が O を知覚する」という言い回しは、文字通り主体 S と対象 O の関係を述べたものと受け取るべきであり、「対象 O が主体 S に何ものかが F であるという内容の経験を引き起こす」と分析されるべきではない、と主張するのである (Campbell, 2002, pp. 117~118)。

キャンベルは関係説をガラス越しの視覚のアナロジーによって示そうとしている。表象説が、知覚を、ガラスに映し出された像を見ることとして捉えているのだとすれば、関係説は、知覚を、ガラス越しに世界を見るようなものとして考えているのである。あるいは、透明なガラスの例が知覚における脳の役割を無視しているように思われるならば、透明なガラスの代わりに、透明性を保つために環境に応じて絶えず調整する必要があるような媒体を想定すればよい、とキャンベルは言う。この場合でも、媒体の微調整は表象像を生み出すためではなく、媒体の透明性を維持するために行われるのである

(Campbell, pp.118~119)。現代の表象主義者にとって、体験の媒体は、自ら身を隠すことによって体験の透明性を確保するとしても、それが因果の終着点であり、表象像の最終的な産出者である続けることに変わりはない。それに対して関係説の脳は、目の前の透明なガラスや、度のあったメガネや、曇りのない水晶体と基本的には同じ役割を演じているにすぎないのである⁴。

このような関係説が正しいとすれば、知覚対象は知覚体験を引き起こしているのではなく、

知覚体験を構成しているということになる。知覚とは知覚対象の表象 (representation) ではなく現前 (presentation) であり、知覚において世界が心に直接与えられているのである。白い壁を私が見ているとき、壁そのもの、壁の白さそのものが私に現れているのであり、物理的白さが分子の特定の配列に他ならないのならば、あれは特定の仕方で配列された分子の塊なのである。シューメイカーの客観的説明ギャップは、現代の表象主義ではなく関係説とともに再登場するのである。

それでは、なぜ知覚は表象ではなく関係でなければならないと関係説は考えるのだろうか。

キャンベルは次のように問う。外界と知覚体験の間関係が表象説の言うように因果的な関係だとすれば、われわれは、結果であるところの知覚によって、どのようにして原因である外界についての知を獲得することができるのだろうか。ある出来事の発生が、その原因となった出来事存在を教えてくれることがあるということは確かである。煙が立ちのぼっていれば、何かが燃えているだろうと推測することができるだろう。しかし、煙を調べても、火とはどのようなものであるか知ることができるわけではない。そして、知覚が表象だとすれば、知覚体験は火に対する煙でしかないのである。だから、表象説を受け入れてしまうと、知覚体験は外界に何が生じているかを指し示す記号の役割を果たすに過ぎないということになり、外界とはどのようなところであるのかということを知覚によって知ることがわれわれには決してできないことになってしまうのである (Campbell, p. 155)⁵。

ガラス越しの視覚の例からうかがえるように、関係説が考察の対象として取り上げるのは主として視覚体験である。そして、視覚体験に関してもならば関係説はある程度の説得力を持つよう

に思われるかもしれない。私に現れているあれは、見えなのではなく、壁そのもの、壁の白さそのものなのではないだろうか。触覚の場合も同様である。机に触れてみよう。私に今現れているこれは、机の触覚像などではなく、机そのものではないだろうか。しかし、痛みやかゆみのような感覚となると関係説は怪しくなってくる。

奥歯が痛いことが関係だとすれば、それは何と何との関係なのだろうか。おそらく、それは、痛みの主体としての私と虫に喰われた私の奥歯との関係なのだろう。すると、歯が痛いとき、虫に喰われた奥歯が歯痛を構成しているということになるのだろうか。歯痛において、虫に喰われた奥歯が私に直接現れているのだろうか。私にはそうは思われたい。歯痛の体験において私に直接現れているものがあるとすれば、それは虫に喰われた歯ではなく、歯痛そのものではないだろうか。

ところで、歯痛を見たり歯痛に触れたりすることはできないが、虫歯ならばそれを鏡に映して見ることもできるし、人差し指で触ってみることもできる。鏡で見たときも、触ってみたときも、痛むときも、虫歯そのものが直接私のもとに現れているのだとすれば、共通の性質を何も持たないように見えるこれら三つの現れの関係はどのようなものであるのだろうか。現れ方の違いは媒体の違いによるのだ、と関係説は答えるのかもしれないが、媒体の役割がピントの調節にすぎないのならば、こうした解答は説得力を欠いている。特に同一の歯の表面を共通の知覚対象として持つ視覚像と触覚像の場合はそうである。虫歯という同一の対象が三つの仕方私に現れるとき、虫歯は三つの異なった因果的経路をたどって現れに至るのであり、後者が前者を表象するのであると考える方が、虫歯そのものが直に三つ現れていると考えるよりもよ

ほど理にかなっているように私には思われる。

それでは、知覚対象と知覚体験が因果関係ならば、われわれは知覚体験によって外界のあり方について確実に知ることはできなくなるはずだ、という関係説の言い分に理はあるのだろうか。

熱について考えてみよう。熱の感覚には外部の対象知覚の要素と身体感覚の要素が混在しているように見える。お湯に手を入れたときに熱いのはお湯か手かという問題が出されることがある。われわれは、「お湯が熱い」と言うときもあれば、「手が熱い」と言うときもある。前者はお湯が熱という性質を持っていると断言するのであり、後者は手に熱さを感じていると断言するのである。では、お湯に手を入れながら、最初にお湯の熱さに注意を向け、次いで、注意の行き先を手で感じられている熱さの感覚へ向け変えるといったことができるだろうか。それはできない相談だ、二種類の熱など与えられていないのだ、と言いたくなるだろう。

この問題に対する正統的な解答は、お湯の熱さが熱さの感覚を引き起こしているというものだろう。お湯が熱いから手が熱く感じられるのである。ところで、熱い物体は熱の感覚を引き起こす以外にもさまざまな因果的効力を持っている。熱い物を雪や氷に近づければ雪や氷は溶けて水になってしまう。熱い物は水銀柱を押し上げ、周りの物を膨張させる。熱い物のそばに置かれた物は、しばらくすると熱さの感覚を引き起こすことができるようになる。われわれが熱は分子運動であると聞かされる以前に熱に関して知っていたことと言えば、熱を持つ物体はこれらの因果的効力を持っているということだけである。少なくとも私にとって、お湯が熱いとは、お湯が手にかかれば手が熱く感じられるし、雪にかかれば雪が溶けるし、温度計にかかれば温度計の目盛りが上がるということである。

私は、熱に関しては、それがどのような結果を引き起こすかということしか知らないのである。こうした私の熱に関する認識に何が欠けているというのだろうか。

ここでも関係説は、熱は熱の感覚において直接に与えられているのであって、雪や氷を溶かしたり、水銀柱を押し上げたりするのは熱の間接的な現れに過ぎない、と言うのだろうか⁶。すると、お湯に手を入れたときに私に姿を現したあれが熱の真の姿ということになるのだろう。しかし、どうしてあのときのあれが雪や氷を溶かしたり、水銀柱を押し上げたり、周りの物を膨張させたり、あたりに陽炎を生じさせたりすることができるのだろうか。全くの謎ではないだろうか。

視覚についても、物が見えるとは物が引き起した観念やセンス・データや視覚像が見えていることである、という思いを捨ててしまえばよいのである。そうすれば外界の事物の性質についての不可知論は消えて行くだろう。ポストの赤い見えの背後に謎の実物が控えているわけではない。お湯に手を入れたときに、熱の感覚を引き起こすというお湯の持つ力の一つが顕在化したように、ポストが赤く見えているとき、ポストが持つ赤さの知覚を引き起こすという力が私において顕在化しているのである。

IV 性質と物

お湯に手を入れながら、「これを熱と名付けることにしよう」と言ってみよう。そのとき「これ」は何を指しているのだろうか。これまでの話が正しければ、「これ」は二つの異なった対象を指すことがありうるということになる。熱の感覚と呼ぶべきものと、お湯の熱さと呼ぶべきものである。「これ」は今私に生じているこの感覚のことを指すとみなすこともできるし、また、

この感覚を引き起こしているものを指すとみなすこともできる。ただ、それぞれの場合において注意の向く先が異なっているわけではないのは上に述べたとおりである。

ところで、「熱」が対象の物理的性質を指す場合にも二種類のやり方があるように思われる。熱とは現にこの感覚を引き起こしているものだ、と思ってみることもできるし、何であれこの感覚と同じような感覚を引き起こすものは熱なのだ、と思ってみることもできる。私が熱を命名したときに熱の感覚を引き起こしていたのが分子運動だったとしよう。「熱とは現にこの感覚を引き起こしているものだ」と私がそのとき心に決めていたならば、熱が分子運動であることは必然的であることになる。熱素が熱の感覚を引き起こしたり、分子運動が熱の感覚を引き起こさなかったり、といったことがしばしばあったとしても、熱と言えば分子運動のことなのである。「熱」はいわゆる固定指示子となるのである。

一方、熱の命名の際に私が「これと同じような感覚を引き起こすものは何でも熱と呼ぼう」と思ったならば、「熱」は傾向性名となるだろう。熱の本質は私に熱の感覚を引き起こすことにあるのであり、それが分子運動によって実現されようが熱素によって実現されようが、物質の持つ熱性にとっては関係のないことである。熱が分子運動であるとしても、それはたまたまなのである。

実際には熱をめぐる事情はこれよりもはるかに複雑なのだろう。熱は熱の感覚だけによって同定されるわけではない。熱は熱の感覚を引き起こす以外にもさまざまな因果的効力を持つのだし、それに、熱の感覚を取ってみても、ある特定の人間の熱体験によって「熱」が何を指すかが決まるというわけでもない。しかしこれらのことを考慮に入れても全体の図柄は変わらないように思われる。熱の因果的効力とみなされ

るものをまとめて「熱的性質」と呼ぶとすれば、物理的性質としての熱とは、現実的に熱的性質を表現しているもの、すなわち、現実世界における熱的性質のカテゴリカルな基盤性質を指すとみなされるか、あるいは、熱とは熱的性質のことであるであるとみなされるか、どちらかであるということになるだろう。今のところ多くの哲学者は、熱が分子運動であることは必然的である、と考えているらしいので、前者の熱概念を受け入れていることになるのだろう。しかし、ここで深入りする余裕はないが、われわれの持つ熱概念は、上の分類に過不足なく合致するような明晰判明なものとは言えないのではないかと私は思う⁷。

色をめぐる問題には熱とはまた違った複雑さがある。色一般 (determinable) ならば、色の感覚を引き起こすものという一言で片付くのかもしれないが、赤やオレンジや青といった色の種類 (determinate) となると、いったいそれらは何なのかという問いに答えることは格段に難しくなる。

たとえば、ヘイルは三種類の色を区別する必要があると言う (Heil, 2003, p. 203)。

(1) 対象が持つ色

(2) 色の現れ、すなわち体験された対象の色

(3) 対象が持つと判断された色

の三つである。

一つ目は物理的色、二つ目は現象的色とそれぞれ呼ばれるべきものであるが、(2) と (3)

の関係は微妙である。ヘイルによれば、(2) と

(3) の違いを理解するには、白い紙の上におかれた赤いボールに真上から照明が当てられている場面を描く画家が何をするか想像するのがよい。画家は様々な色の絵の具を使ってボールを描くことによって、ボールは一様に赤いのだという判断を見る者のうちに引き起こそう

とするだろう。光を浴びている部分と影の部分ではボールの見え方が異なるにもかかわらず、ボールは一様に赤いと判断されているのである。また青いコートは夕暮れになると色がくすんで見えるが、それにもかかわらず、同じ青色のままだと判断されるだろう。

それに加えて、同じ緑でも木の葉の緑 (対象色) と信号の緑 (光の色) は違うし、組成が異なっているにもかかわらず同じ色の感覚を引き起こすメタメリズムと言われる現象も知られている。それでも、対象色に限るならば、熱の場合と類似のことが言えるのではないかと思われる。

ポストを見ながら「これを赤と呼ぶことにしよう」と言うとき、今この感覚を引き起こしているものと同じ種類のもを「赤」と呼ぼうと固く心に決めることもできるし、このような感覚を引き起こすものならば何でも「赤」と呼ぼうと決めることもできる。前者のように決めた場合、「赤」とは、たとえば特定の反射率を指すことになるし、後者のように決めれば、「赤」とは物体の持つ赤の感覚を引き起こす力ということになるだろう。赤に関しては後者の決めの方が自然に思えるかもしれない。赤く見えることが赤の本質なのだと言いたい強い気持ちを抑えることは難しいだろう。しかし、赤が傾向性だとすれば、傾向性が発現することがないような世界、たとえば視覚機能を備えた生物のいない世界では紅葉は赤くないことになる。それどころか、そのような世界には色そのものがないことになってしまう。ちょうど水のない世界では何もかも水溶性を持たないようなものである。これはこれでわれわれの直観に著しく反するだろう。結局のところ、色に関してもわれわれの持つ概念は必ずしも首尾一貫しているわけではないように思われる。

われわれは、熱や色などの可感的性質の概念

だけではなく物の概念も持っている。では、物とは一体何だろうか。われわれの持つ原始的な物の概念とはどのようなものなのだろうか。

水の命名の場面を考えてみよう。先程のお湯に手を入れながら、触覚像を頼りに、「これを水と呼ぶことにしよう」と言ったとき、「これ」は何を指しているのだろうか。熱のときには、私は私の手に感じられる熱感に注意を向けることによって指示の対象を選別していたのであるが、今回は手全体に感じられる軽い圧力感や手を動かしたときに感じられる抵抗感も注意の対象に加わるだろう。しかし、現象的熱の場合と違って「水」にはこうした触覚的現われ自体を指す用法はない。われわれは特定の熱感や圧力感や抵抗感の集合を「水」と呼んでいるわけではない。現象的熱や現象的赤はあっても、現象的水という概念をわれわれは持ってはいないのである。

それでは私は、熱の感覚の原因となるものを熱と呼んだように、今私が右手に感じている触覚像の原因となっているものを「水」と呼ぼうとしているのだろうか。「水」とはこの触覚像を引き起こしている物のことなのだろうか。あるいは、これと同じような触覚像を引き起こす物はすべて「水」と呼ぼう、と言いたいのだろうか。むしろ、私は単純に「私が今右手で触れている物が水なのだ」と言いたい気がしてくる。

「私の右手を取り囲んでいるこれ、これが水なのだ、そして、これと同じ物があればそれもやはり水なのだ。」

私は触覚像に触れているのではなく物に触れているのであり、私が触れている物が触覚的な姿で私に現れているのであるから、結局、「私が触れている物」とは「私の右手に触覚像を引き起こしている物」のことなのであるが、私が「これを水と呼ぼう」と決めたときに、「これ」によって「この触覚像の原因」ではなく「私が触れ

ている物」を指していると言いたい気持ちになるのは、次のような世界像を私が抱いているからである。

私は何かに触れる。するとその何かは、固く、ざらざらしていて、熱い物として私に現れる。私は何か固くてざらざらしていて熱い物に触ったのである。私はざらざらという性質や固さや熱さという性質に触れたのではない。私が触った物が固く、ざらざらしていて、熱かったのである。その物は、私がそれに視線を向ければ、触れているときは異なった姿で私に現れることだろう。また、私は何かの中に手を入れる。それは、ぬるく、手全体を軽く圧迫するが、ほとんど抵抗がなく、つかむことができず、特定の形も持たない。私は、そのとき私に現れたぬるさと無抵抗性と無定形性の束を「水」と呼ぶのではなく、私の手に触れている物、すなわち、ぬるさと無抵抗性と無定形性を持つとともに、私の触覚に現れないその他さまざまな性質を持っているに違いない物を「水」と呼ぶのである。

物理的熱や物理的赤と違って、私が水の命名を行うときには、私が今触れている物と同じ種類の物を「水」と呼ぶことにしようとするだけでよい。「水」の指示の決定のし方にあいまいなところはない。したがって、私が触れている物が H_2O の集まりならば、水は H_2O 以外ではありえないのである。

物についてのこうした素朴な実感のうちに、実体・属性の形而上学の原型を見てとることはさして難しいことではないだろう。

水が水であるためには、それが特定の温度であることが必要であるというわけではない。温度という性質は、水であるための本質的性質ではないとみなされている。お湯に手を入れながら、「これと同じような触覚像を引き起こす物はこれからすべて水と呼ぶのだ」と心に誓った人はいなかったということである。もちろん、熱

の場合にも増して、「水」の指示対象が触覚像だけによって決まるなどということはありません。視覚的性質や味覚的性質、さらにはそれ以外の水が持つとされる様々な因果的効力も「水」の指示の決定には関与しているのだろう。しかし、水が H_2O であるならばそうであるのは必然的なことであるという説が、今日、哲学の常識となっているとするならば、「水」の指示が決定されるのに使われる水的性質が、水が水であるためには不可欠なものではないと考えられているのである。これについてもこれ以上論じる余裕はないが、それは、やはり多くの者が暗黙のうちに伝統的な実体・属性の形而上学を受け入れているからではないかと思われる⁸。少なくとも私は、同一性をめぐるクリプキの議論が最も説得的なのは「水」や「金」のような物質名の場合なのではないかと考える (cf. Kripke, 1980)。

おそらく、今日でも、大勢の人間が、私が素朴な仕方では抱いていたのと同じような物質観を抱いているのである。

では、視覚の場合も事情は変わらないだろうか。私は何かに視線を向ける。その何かは白色をした物として私に現れる。私は、今度は白色をした物を見ていると同時に、白色そのものを見ていると言いたくなる。視覚の対象は物であると思っている一方で、私は、色も視覚の対象であると言いたい誘惑にかられる。いったい、私は物を見ているのだろうか色を見ているのだろうか。

私が全面白い壁で囲まれた部屋に入れられたと仮定しよう。私に現れるのは白い見えだけである。白い見えを通して、物理的白さに注意を向け、次いで壁に注意を向ける、ということが私にできるわけではない。壁と白さの間の現象学的違いは私には与えられていない。しかし、壁と白さの概念上の違いは私には明白である。

白さとは、赤い見えとも青い見えとも違うこの白い見えを引き起こしているものであり、壁とは私の前にある物であり、私の視線が向けられている物である。

私は壁を見ることも壁に触れることもできると信じている。そこで、歩を進めて目の前にある物に手を触れてみる。私は壁に触れることに成功したのである。しかし私は白さに触れたわけではない。私は色に触れたり色をつかんだりすることはできない。私は白さに触れたのではなく白い壁に触れたのであり、ピッチャーは白さをつかんだのではなく白いボールをつかんだのである。同じように私は冷たさを見ることはできないが、冷たい水ならば見ることができる。ただ、見ただけでは水が冷たいかどうか分からないだけである。

物を見ることによってわれわれは物が何色をしているか知ることができるし、物に触れることによって物が冷たいか熱いか知ることができる。色とは物が視線を向けられたときに視線を向けた者に対してあらわにする自らの一側面のことである。だから、やはり、色が視覚の対象であると言ふべきではない。私は壁を見ているのであり、その壁が見ている私に白いものとして姿を現しているのである。あるいは、私は白い壁を見ているのである。自分が何に視線を向けているかわからないときには、私には何かかわからないものが白く見えているのであり、白い何かが見えているのである。

物と性質と知覚体験の関係は次のようなものであるだろう。

物とはわれわれが触れたり視線を向けたりすることのできるものである。物に触れたり物に視線を向けたりする知覚の主体のうちには様々な種類の見えや触覚像が生じる。物において、知覚の主体に見えや触覚像を引き起こしているところのものが物の可感的性質である。

注

- 1 体験の透明性については Harman (1990) を参照されたい。表象主義の代表的な著作として Dretske (1995)、Tye (1995) を挙げることができる。
- 2 表象主義の問題点については星野 (2004) を参照されたい。
- 3 表象説と関係説の対立点については Crane (2006) が詳しい。現代における素朴実在論の復活という点に関しては Campbell のほかに、M. G. F. Martin (2006) を挙げておく。
- 4 ガラス越しの視覚の比喩は大森荘蔵がしばしば用いた比喩でもある。さらにキャンベルの脳についての説は大森の脳透視 (大森、1982、6 章) を思い起こさせる。大森を関係説の先駆とみなすこともできるだろう。
- 5 バーンとヒルバートは、知覚体験によって得ることができるのは対象そのもののあり方についての情報ではなく、対象がわれわれのうちに引き起こした結果についての情報だけであるという説を自然的記号説と呼んでいる (Byrne, 2009, Byrne and Hilbert, 2011)。バーンによれば、色に関する自然的記号説の最大の問題は、それが、色は対象そのものに属するように見えるというわれわれの直観に反するところにある。
- 6 熱感水銀柱の上昇の観察よりある意味では熱をより直接的に認識する方法である。水銀柱の上昇を確かめるには水銀柱を見なければならないからである。しかし、熱感水銀柱の上昇も対象のエネルギーの移動の一形態であることに変わりはないだろう。
- 7 詳しくは星野 (2011) を参照されたい。
- 8 詳しくは星野 (2011) を参照されたい。

文献表

Block, N., Flanagan, O., and Güzeldere, G., (eds.)(1997) *The Nature of Consciousness*, The MIT Press.

Byrne, A. (2009), "Sensory Qualities, Sensible Qualities, Sensational Qualities", in McLaughlin, B., Beckermann, A., and Walter, S.

Byrne, A. and Hilbert, D. R. (2011), "Are Colors Secondary Qualities?", in Nolan, L.

Campbell, J. (2002), *Reference and Consciousness*, Oxford University Press.

Chalmers, D. J. (ed.)(2002), *Philosophy of Mind*, Oxford University Press.

Crane, T. (2006), "Is There a Perceptual Relation?" in

Gendler, T. S. and Hawthorne, J.

Dretske, F. (1995), *Naturalizing the Mind*, The MIT Press.

Gendler, T. S. and Hawthorne, J. (eds.)(2006), *Perceptual Experience*, Oxford University Press.

Harman, G. (1990), "The Intrinsic Quality of Experience", in Block, N., Flanagan, O., and Güzeldere, G.

Heil, J. (2003), *From an Ontological Point of View*, Oxford University Press.

星野 徹 (2004)、「表象主義とクオリア」『埼玉大学紀要 教養学部』第 40 巻第 1 号。

星野 徹 (2011)、「同一性と必然性」『埼玉大学紀要 教養学部』第 46 巻第 2 号。

Kripke, S. A. (1980), *Naming and Necessity*, Harvard University Press. (『名指しと必然性』、八木沢、野家 訳、産業図書)

Levine, J. (1983), "Materialism and Qualia", in Chalmers.

Levine, J.(1993), "On Leaving Out What It's Like", in Block, N., Flanagan, O., and Güzeldere, G.

Nolan, L. (ed.)(2011), *Primary and Secondary Qualities*, Oxford University Press.

McGinn, C. (1989), "Can We Solve the Mind-Body Problem", in Block, N., Flanagan, O., and Güzeldere, G.

McLaughlin, B. P., Beckermann, A., and Walter, S. (eds.)(2009), *The Oxford Handbook of Philosophy of Mind*, Oxford University Press.

Martin, M. G. F. (2006), "On Being Alienated", in Gendler, T. S. and Hawthorne, J.

大森荘蔵 (1982)、『新視覚新論』、東京大学出版会。

Shoemaker, S. (2003), "Content, Character and Color", *Philosophy of Mind, Philosophical Issues, Volume 13*, pp. 253~278.